

木曾川

INDEX.....

ふるさとの街・探訪記〔南濃町〕

遙かなる時の流れと豊かな自然に熟成された南濃町

AREA REPORT

養老山地と羽根谷の砂防事業

気ままにJOURNEY

清流に名月映えて。南濃の秋、風流の季

歴史ドキュメント

大正改修における長良川改修と揖斐川改修

TALK&TALK

長良・揖斐両川の大正改修をたどる

民話の小箱

田代池の龍神伝説



木曾川文庫は治水の資料館。水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、これからの治水を皆様とともに、考えていきたいと思ひます。今回は養老山麓に広がる南濃町から、その歴史や砂防事業の変遷をご紹介します。また、大正改修第三編では、長良川・揖斐川改修の概要を特集します。



遙かなる時の流れと豊かな自然に熟成された南濃町

養老山地に抱かれた南濃町は、豊かな自然が息づく町。恵まれた自然環境、そして日本の西と東をつなぐ地理的条件から、岐阜県下でもいち早く文化が開けてきました。その半面、戦乱の舞台となることも。江戸時代からは新田開発や砂防事業が開始され、現在では「緑の文化都市」を目指し、多彩な公共事業が進められています。



南濃町中部地区の航空写真



南濃町のあらまし

なだらかな養老山地に抱かれ、濃尾平野を一望に見下ろす南濃町は、岐阜県でも唯一のみかんの栽培地帯。県の最南西端に位置しています。東西五・五km、南北一五・五kmに連なる帯状の地形で、東側には津屋川・揖斐川が南流し、豊富な水、澄んだ空気、温暖な気候から、太古の昔から人々が暮らしを営んでいました。町の西側の養老山地沿いに、志津谷・羽根谷・盤若谷等二七の小河川谷が発達し、下流へ多量の土砂を押し流し典型的な扇状地を形成しています。町域は約六割の山林と扇状地、三角州から構成され、山麓を縫うように、近鉄養老線国道二五八号が走り、大垣・桑名間を連絡西と南は三重県、東は津屋川・揖斐川を隔て海津郡海津町・平田町と接しています。

岐阜県下唯一の縄文貝塚

南濃町は、濃尾平野一帯でも最も古くから人々が住み始めたところ。それを示すものとして、庭貝貝塚と羽沢貝塚があります。これらの貝塚は岐阜県下でも唯一の縄文遺跡です。南濃町の中央、円満寺山の裾野に小高い丘をなす庭貝貝塚は、約五千年以前の縄文中期のもの。出土した貝類の多くがカキなどの海水産であることから、このあたりが当時の海岸線で、濃尾平野のほとんども海であったとみられます。羽沢貝塚はこれより二千年ほど経た縄文後期のもの。出土した貝の多くはシジミで、これらから、このあたりは遠浅の海であったと想像されます。こうした出土状況から、二千年の間に



集落分布図

文化の流入経路を示唆する古墳群

養老山地を中心に点在する百基以上の古墳群は、日本統一をなし遂げた大和朝廷との密接な関係や物語る遺跡で、東天神古墳群や円満寺山古墳群は代表的な存在です。これらは四世紀後半に成立したもので、その形態は前方後円墳、円満寺山古墳群は岐阜県でも最古とされています。円満寺山古墳群は竪穴式石室が特徴で、その出土品は三面の漢式鏡や直刀等の副葬品など。当時、漢式鏡は朝廷からいわば辞令代わりでこの地方を治める者に授けられたもので、こうしたことから、かなりの権力の支配者がこの一帯を治める政治の中心ではなかったかと言われています。このように、この辺りが開けたのは、この



羽沢貝塚の発掘風景

地が日本の西と東を結ぶ交通の要衝であったため。大海人皇子と大友皇子が骨肉の争いをした壬申の乱(六七二)の際、この地も少なからず影響を受けたのではないかと説く。こうした地理的条件によるものだとはいえます。

刀匠・志津三郎兼氏

仏教文化が隆盛を極めた奈良時代、聖武天皇は奈良には東大寺を、諸国に国分寺を建立することを命じられ、美濃には行基により青野(大垣市)に国分寺が建立されました。この折、この地を訪れた行基は、風光明媚なこの地に寺を開かんと聖武天皇に願ひ出ました。こうして建立されたのが行基寺、円満寺をはじめとする数カ寺です。中でも聖武天皇の勅命による行基寺は、七堂伽藍を有する立派なもの。全国を行脚し仏教の布教や農業の改良などを広め歩いた行基は、晩年行基寺に戻り、その生涯を終えたと伝えられています。

この寺は以後約六百年にわたって栄えましたが、南北朝時代の戦火でことごとく焼失しています。

こうして歴史は武家による鎌倉時代となりますが、南濃町の北部に位置する志津は古くから美濃の刀鍛冶の所在地のひとつとして名高いところでした。



善教寺

を記念したもので、公園内には鹿兒島県の花であるカイコウズを植栽した「薩摩カイコウズの森」が平成八年にオープン。今後は「記念植樹ゾーン」・「記念の森」が整備される予定です。

参考文献

- 『南濃町史』通史編南濃町発行
- 『岐阜県地名事典』角川書店発行
- 『南濃町のすがた』
- 『海津郡教育振興会 発行』
- 『南濃町教育委員会 発行』
- 『南濃の歴史散歩』南濃青年クラブ発行
- 『南濃見聞録』南濃町発行
- 『広報なんのう』南濃町発行
- 『砂防に挑んだ人たち』南濃町発行

下池の干拓に一生を捧げた平松不殺

下池は岐阜県下最大の池。開拓の試みは江戸時代より続けられてきましたが、いずれも失敗に終わっています。明治に入り、平松不殺をはじめとする海西村(現在の平田町)の佐久間一族が岐阜県下最初に近代開拓事業として新田開拓に着手しましたが、わずか二〇三〇aできただけ。そこで平松不殺らは、当時の最新式排水機を使うことに着眼。大正五年ころから着手し、大正九年頃までに約三五haの開拓に成功。その後、下池西部耕地整理組合を結成し、県の補助を受けるなどして約二〇haに及び干拓工事は昭和一〇年五月に完成しました。



平松不殺

ふるさとの街・探訪記



氏家ト全の墓

美濃川は、越前・大和両国の影響を受けていますが、刀匠・志津三郎兼氏もまた、大和の国から養老山地の志津に移り住み、名刀を打ったといわれています。良質な炭、豊富な水に恵まれた志津は、刀を鍛錬するには格好の土地柄。以来、兼氏の技を継承した集団が志津周辺に居住し、作刀に励んだといわれています。志津二郎兼氏の顕彰碑は、南濃町の北部にある善教寺の境内に残されています。

ト全塚と江戸時代の複合支配

戦国時代、織田信長の天下統一を阻んだ勢力が一向門徒です。長島(現三重県長島町)でも激しい一向一揆が起きていますが、この時の織田方の総大将が西美濃二人衆の一人といわれた氏家ト全です。元龜二年(一五七二)、織田信長の指令のもとト全は軍を進めました。さすがのト全も大敗、石津郡太田村まで引揚げたところで首を討たれ、最期を遂げました。その遺骸を葬ったト全塚は、南濃町安江に今も残されています。

関ヶ原の合戦以降、この一帯は、徳川方で戦功を挙げた徳永法印寿昌の領地となりました。寿昌は本拠地高須(現在の海津町)で城郭の修理・拡充に励むなど、名君の誉高き人物でした。

しかし、寛永四年(一六二七)、大阪城一の丸石垣築造を命ぜられた二代昌重が酒色におぼれて失態をおかし、領地は没収という憂き目に、徳永氏に代わって、美濃国奉行岡田将監の支配となりました。

その後、この地域は、幕府直轄領、高須藩

小笠原氏、松平氏、大垣藩戸田氏の複合支配を受けることになりました。

新田開発と用水事業

美濃地方における新田開発は、正保一・元禄期(一六四四～一七〇四)が開発の頂点でした。「正保郷帳」によればこの地方の新田は、太田新田(幕府直轄領・高須領入会)、志津村新田(大垣藩戸田領)など。明暦四年(一六五八)には、尾張藩土藤田大学を出资者に約二年の歳月をかけて、駒野新田、釜段新田が開拓されました。しかし同時に開拓を始めた有尾村草場下池は低窪の池であるため失敗に、元禄二年(一六九九)、多芸郡上笠村の国枝彦太郎が大金を投じて再び下池の開拓に着手し、一応は完成。下池彦太郎新田と命名しますが、度重なる津屋川の氾濫で、下池は荒れ果てた池に逆戻り。この池が大干拓地となるには昭和の時代まで待たなければなりません。こうした新田開拓に連動するように、用水事業も実施され、文政年間には駒野村に倉羅谷井水や東谷井水などが開拓されています。その一方、羽根谷の砂防事業も江戸時代から始められました。

石津みかんと柑橘翁

南濃町のみかん栽培の始まりは安永年間(一七七二～一八〇〇)のこと。山崎村の古川甚蔵がみかんの苗を植えました。これが「山崎みかん」と呼ばれるものでした。しかし、この地域がみかんの一大産地となったのは明治時代のこと。大里村戸長・伊藤東大夫の功績によるもの。この頃の養老山地の東側は急斜面で平地が少なく、土地がやせていて人々の生活は苦しいものでした。そこで、伊藤は紀州方面を視察し、当地の気候と地形等がよく似ていることに着目。明治五年には紀州のみかん苗を太田の栗原地区に植えました。その際、揖斐川の沖積土を苗の間に搬入、客土法による栽培育成は功を奏し、大きな収益をあげました。当初、疑問視していた人々も山を開墾し、



柑橘翁顕徳碑

みかん園に励むようになったといわれて、最盛期の栽培面積は二二〇haまで広がりました。

これが「石津みかん」と呼ばれるもので、南濃町は岐阜県唯一のみかん生産地として発展を遂げています。

この伊藤東大夫は「柑橘翁」と称えられ、太田杉生神社境内には遺徳を偲んで石碑が建立されています。

緑の文化都市をめざして

明治時代廃藩置縣により、行政機構の変遷を繰り返した南濃町は、昭和十九年、海津郡城山町、石津村、養老郡下多度村の一部の一町二村が合併して誕生しました。高度経済成長期を迎えると住宅団地の造成が進み、交通網の整備に伴って、名古屋のベッドタウンとして成長を遂げました。その一方、国道二五八号沿いには、ドライブイン・工場・大型スーパーのほか、町の体育館・文化会館が林立し、景観の変容には著しいものがあります。こうした成長を背景に平成五年には第三次総合計画の一環として「緑のネットワーク構想」を策定。その拠点である「緑の文化公園」



薩摩カイコウズの森(友好の森)

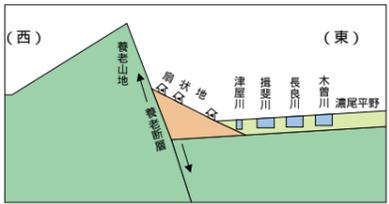


養老山地の砂防

養老山地と羽根谷の砂防事業

養老山地の砂防事業

養老山地は岐阜県の南西端の三重県境から北西に伸びる約二四km、東西約八km、標高六〇〜八百mの山地です。今から二億年以前は古生代の海底に堆積したものが地殻変動により陸地化し、約六千万年前の断層活動により南濃町側が陥没したため、急斜面になっています。



養老山地の断面図

現在、この養老山地の東側斜面を流れる大小四一の渓流は、断層が侵食されてきたもので、大雨のたびに大量の土砂や土石が流出し、その土石が谷の出口付近に堆積して扇状地を形成してきました。

この扇状地は大昔から、生活の場、生産の場として人々が住みつてきたところ。そのため、ひとたび大雨が降れば、鉄砲水が土石を伴って人間の住居、作物を一挙に押し流し、大きな被害を引き起こしていました。

こつした被害を防ぐため、扇状地に住む人々はさまざまな工夫をこらしてきました。この事業がいわゆる「砂防」で、「急傾斜地」「地すべり地」「土砂崩壊」など、こつした砂防で使う常用用語のすべてがこつにはあり、人々は自然と闘いながら暮らしを営んできました。

こつした地形上、谷の下を電車や国道が走るのも、南濃町ならではの特徴の一つです。

南濃町の砂防事業の始まりは江戸時代の立派に果たしており、堂々たる雄姿が自然に調和しています。

砂防事業の始まり

ちなみに羽根谷巨石堰堤二本のうち、第一号の規模は高さ二m、幅五mの堂々たるもの。全体の規模、石の大きさとも最大級。保存度も良好で砂防史上貴重な遺構となっています。

大正・昭和の砂防事業

明治以来、山腹工事を主体として砂防工事が実施されてきましたが、下流河川への土砂供給を調節するためには、扇状地での堆積・乱流を抑制し、流路を固定するための渓流工事が必要でした。また、砂防工法的にもセメント使用が一般化してきたことにより、渓流に強固な構造物の築造が可能となりました。

大正時代の砂防事業は、こつした技術力の進歩を背景に、従来の山腹工事から、セメントを導入した練石積み堰堤に移行、土砂抑止を主体とする流路工事も実施されました。さらに、深岸・深床の侵食を防止するための流路工や、貯砂量の大きな土砂調節機能をもつ大型ダムも建設されています。

山腹工とは、その目的から山腹基礎工、山腹緑化工に大別されますが、羽根谷においては山腹斜面の崩壊地に、山腹緑化が実施されています。



代表的な砂防法

こつした一連の事業の中でできたのが羽根谷だんだん公園とさぼろ遊学館です。公園は南濃町の「緑のネットワーク構想」の拠点施設にもなっており、隣地の生活環境保全林「月見の森」とあわせて、今後、も広域的な整備が予定されています。



羽根谷だんだん公園



羽根谷の流路工
南岸に自然石を埋め込み、高水敷を芝生広場、子ども遊園地、ベンチ、花壇を配した構造となっている。
延長L=800m、河幅W=24.5-27.0m、護岸高H=1.0m。

この羽根谷一帯では、砂防工事を併せて広い河川敷を利用して、「こを水に親しみ、憩いの場、遊びの場とする」、岐阜県公共砂防環境整備事業が昭和五五年から始まり、事業は羽根谷の河川敷、延長八〇〇mにわたる、川床・底水路の砂防事業等は県事業、河川敷の公園化は町事業で整備、これより上流七九五mは、昭和六三年から「公共荒廃砂防事業」として整備されました。

現在の砂防事業

『南濃町史』通史編南濃町発行
『砂防に挑んだ人々』南濃町発行
『養老山地の砂防』岐阜県土木部砂防課 発行
『岐阜県土木部砂防課 発行
『南濃町見聞録』南濃町発行

『南濃町史』通史編南濃町発行
『砂防に挑んだ人々』南濃町発行
『養老山地の砂防』岐阜県土木部砂防課 発行
『岐阜県土木部砂防課 発行
『南濃町見聞録』南濃町発行

『南濃町史』通史編南濃町発行
『砂防に挑んだ人々』南濃町発行
『養老山地の砂防』岐阜県土木部砂防課 発行
『岐阜県土木部砂防課 発行
『南濃町見聞録』南濃町発行

中南部浄水公園

北部浄水公園

しかし、美濃国は複合支配だったため、同じ谷筋でも一貫した治山のための方法はとられず、それぞれの藩で採採してはならない木（留木・停止木）を制定し、公用の木材の確保や土石流の阻止に努めました。また、水持林を作って水源地を守ること、山の土砂の流出防止に力を入れました。



円成寺・宝曆治水犠牲者墓

宝曆四年（一七五四）、薩摩藩による御手伝普請は伊勢・美濃・尾張の三国にまたがる大規模な治水工事でした。油島の喰違堤、大樽川の洗堰、逆川の洗堰の築造など、わが国の治水の歴史から見ても、例のないほどの難事業に挙げられています。

江戸時代の洪水の記録を調べると慶長一〇年（一六〇五）〜宝曆三年（一七五三）までの木曾三川での洪水は一〇五回、揖斐川はその中でも四五回と記録されており、こつした災害を背景に、近世史上稀にみる大工事は実施されたのでした。

宝曆工事において、南濃町一帯は、第一期工事として着手されました。この第一期の中でも薩摩藩が特に難しい工事場として十か所の名前を挙げていますが、その中には羽根谷上流の砂石留喰違石堰、羽根谷河口揖斐川の川渡え、山崎谷砂利除など南濃町の工事場所も含まれています。

これらの工事は宝曆四年一月、駒野村の庄屋から出された「羽根谷馳出砂防御普請願」が取り上げられた形で行われたもので、砂石締切石積の築造や下流の洲渡を主体に実施されました。

この宝曆治水は宝曆五年には完了しましたが、多くの薩摩藩士が殉死、南濃町の円成寺には、薩摩義士の墓が残されています。

いきいき南濃

ステージあり、バザーあり。「いきいき南濃」は、見る楽しみだけでなく参加する喜びも味わうことができる町民手作りのイベントです。平成元年から毎年実施されており、近年では地域にもすっかり定着した、人気のイベントになりました。今年の開催予定日は11月2・3日。さぼろ遊学館周辺をメイン会場に、楽しいイベントをたくさん企画しています。



南濃町行事

新春マラソン大会.....	1月
文化祭(働く婦人の家・文化会館).....	2月・3月
薩摩義士祭(円成寺).....	4月
東海の自然歩け歩け大会(東海自然歩道).....	4月
円満寺まつり.....	5月
さぼろ遊学館こどもイベント.....	6月
砂防フェアINなんのう(さぼろ遊学館).....	6月
さぼろ遊学館サマーフェスティバル.....	8月
働く婦人の家盆踊り大会(働く婦人の家).....	8月
観月会(月見の森).....	9月
杉生神社まつり.....	10月
東天神社まつり.....	10月
ミカン狩り(町全域).....	10月
イベント・いきいき南濃(さぼろ遊学館周辺).....	11月



公共交通機関利用
大垣から駒野まで近鉄養老線 普通 7で35分
桑名から駒野まで近鉄養老線 普通 7で40分
名古屋から桑名経由 近鉄名古屋線 7で60分
マイカー利用
名神高速道路、大垣I.C.で降りて南へ13km
東名阪自動車道、桑名東I.C.で降りて北へ16km
名古屋から約29km、車で55分

気ままにJOURNEY

できるユニークな野外ミュージアムです。公園のメイン施設となるのは、「さぼろ遊学館」。マルチメディアパソコンでのゲームや模型を用いた体験学習を通して、土石流発生のメカニズムや砂防の概念を学んでいきます。

公園内の巨石堰堤は、近代砂防事業を語る上で欠かせないシンボルモノメント。日本最古といわれ、第一級土木建造物にも指定されていますが、清水がわき出る堰堤下方は水遊び場として人気も高いようです。

敷きつめられた巨石、石を縫って流れる水。貴重なこのスペースに遊び、親しむ中で、子ども達は砂防の意義を感じ取っていくことでしょう。



さぼろ遊学館

水遊び場周辺には、「竜のモノメント」も設置されています。これは、ドイツ人彫刻家、クラウス・カンマーリヒス氏の制作によるもの。西洋と東洋の意匠が合体したというその姿は、近代砂防の祖、ヨハネス・テレーケの足跡を描いたものなのかもしれません。また、立つ位置によって見え方の変化する『視覚トリック』を用いた不思議なデザインに、子ども達も興味津々といった様子です。

その他にも、桜島や雲仙普賢岳の土石流の石を配した「土石流の広場」、遊歩道、キャンプ場(計画中)などの施設が、豊かな自然の中に点在しています。野鳥のさえずりに耳を傾けながら、心地よい秋風に包まれながら砂防の歩みをじっくりと体感してみたいかがでしょうか。

緑の文化公園にある月見の森・月見台は、遠く津尾平野を一望する大パノラマの展望台。夜半には、揖斐川・津屋川に映る月、スターダスト、都市のネオンサインがそれぞれに美しさを競いあい、まさに宝石をちりばめたようなきらめきが眼下に広がります。また、週末のライトアップも、秋の夜長を彩る粋な演出。公園一帯にはススキも多く自生しており、一味違った「お月見」が楽しめること間違いありません。

一方、秋の深まりとともに、行楽のシーズンはいつそ華やかさを増してゆきます。

園内のおいしい森広場には、南濃の名産品みかんのフルーティな香りが漂い、爽やかな秋をたたえます。ハギ、カエデ、ナナカマド、色とりどりの散策路は、訪れる人の瞳と心を優しく和ませます。子ども達の笑い声がこだまするワイルドアスレチック、天守閣を思わせる山の灯台。秋の緑の文化公園は、まさにレジャー満開です。

名月、収穫、紅葉。鮮やかな季節のリレー。秋風に吹かれてうっとりゆく森の表情を、見つめに出かけてみませんか。

大クスは100年ともいわれています。この長い歴史の中で、いったいどれだけの人がこの木陰に集い、憩い、語りつづけたのかは、もはや知る由もありません。しかし、この大クスと諏訪神社に残された三つの伝説は、この木陰で人々が確かに集い、語りつづけたことを、鮮明に今へ伝えてくれています。

一つの伝説は、四国の伊予の殿様・松山侯が国替えになった時のこと。殿様一行の千石舟は、川を伝ってこの地にもやって来ましたが、その際、船頭は、この大クスの根元に舟をもつなをゆわえたのだとか。

きつと当時からこのクスは、他の木に比べても立派な佇まいをみせていたのでしょう。

また、別の言い伝えには、この土地の人々は昔からこの木を神木として崇拝していたため、諏訪神社の神霊を迎えてこの木の近くに神社を建立したのだ、という説もあります。

三つの言い伝えは、諏訪神社の建立が松山地区にある城山という山に關係しているとする説。これは戦国の世、織田信長の家臣が城山の山頂に城を建てる際、クスの下にも社を建立して崇拝した、という言い伝えに基づいています。木の下に建てられた社が諏訪神社のはじまりとなり、いつの間にか主従逆転してしまっただけというお話。

これもまた、当時クスが人々にいついかに大きな存在であったかを物語っているように、とても興味を持てます。

いずれにしても、古くからこの木が人々のランドマークであったことは確かでしょう。千年の時の中で、一つひとつ年輪を刻み、少しずつ枝先を伸ばしてきた大クス。その狭間に見え隠れする「生きた」逸話に出会う時、私たちの胸はときめかずにいられません。



根回り九.五メートルもある大クス

葦の生い茂る小島、川べりを覆う木々。手つかずの自然に護られた津屋川は、県内でも屈指の清流といわれています。深瀬でもその透明度は失われることなく、水底にゆれる水草の碧をくっきりと川面へ映し出したまま、ゆるやかに揖斐川へと注いでいます。そんな清流の源を辿ってゆくと、美しい水に育まれた「小さな命」にも出会ったことができました。

ハリヨ。体長三センチほどのこの



ハリヨ

清流の宝石・ハリヨが棲む津屋川



たわわに実る南濃みかん

あるときは情熱的な夕焼けに、あるときは蒼ざめた月光に。季節の光を反射しながら、清流は、どこまでも穏やかです。生命、雅び、実り、闘い。そのすべてを包み込むように、清流は、どこまでも優しげです。川と、森と、月と、星と。美しい自然に抱かれた水清き里から、今年も、秋のしらせが届きました。

魚は、岐阜・滋賀両県の湧水池にしか棲息しないトゲウオ科の淡水魚。営巣、闘争といった特異な性質を持つため、学術的にも非常に注目されている魚種です。とはいえずこの一帯では「ハリヨ」「ハリノコ」などの愛称で古くから親しまれてきたお馴染みの魚。透明な川面に銀色の魚影を残しながら、リュウジツ、リュウジツと泳ぐ様子は、水清き里・南濃町のシンボルでもあります。年々減少の一途をたどり、絶滅の心配もささやかれているハリヨ。この『清流の宝石』を護ろうと、近年では町民有志による「ハリヨを守る会」も発足されました。

清らかな水にしか棲むことのできないハリヨ。この命のきらめきを、いつまでも大切に護っていききたいものです。

秋の夜長を楽しむ緑の文化公園・月見の森 月々に月見の日は多ければ、月見の日はこの月の月と、古くから詠まれているように、この季節の醍醐味といえる。何となくも月見。中秋から晩秋にかけての夜は、その名の通り「月見の森」でじっくりと楽しみたいところ。

西山の極楽、行基開基の月見寺。毎秋には多くの月見客で賑わう南濃町。そもそもこの一帯は、昔から名月と関りの深い土地でした。その因縁を今に語り継いでいるのが、月見の森の南に位置する行基寺。

極楽浄土の眺めを味わう。はるかかな時代の風流に、雅やかな小旅行が楽しめます。

砂防を体験的に学ぶ羽根谷だんだん公園。土石流との闘いを続けてきた南濃町にとって、砂防の歴史は町の歴史。近代砂防事業をモチーフに作られた『羽根谷だんだん公園』は、楽しみながら南濃町の歩みを学ぶことができます。

極楽浄土の眺めを味わう。はるかかな時代の風流に、雅やかな小旅行が楽しめます。



行基寺

清流に名月映えて。南濃の秋、風流の季



月見の森

別名月見寺と呼ばれるこの古刹こそが、南濃町と月を結びつける由縁となりました。寺の開基は今から約二〇〇年前、天平文化華やかなりし頃、美濃、尾張、伊勢、三國の守護霊山として、また聖武天皇の勅願寺として、大聖・行基の手により建立されました。奈良の東大寺(大仏)と同じく七堂伽藍善美が尽くされているその様は、ここが創建当時より名高き霊場であったことを物語っています。以来、幾多の高僧が帰依・参籠するばかりでなく、美濃高須藩当主・松平家の菩提寺としても篤い信仰を獲得。そして今もなお、濃尾近郊の人々から、西山の極楽、とたたえられるに至っています。

極楽と呼ばれた理由は、その素晴らしい眺めから、八千坪余りの敷地がすべて山の上に位置しているため、境内からは、海に、山にと、近在九つもの国が一望のもとに納まりました。それはまるで、極楽浄土から下界を見下ろすような絶景。特に書院や月見の間からの眺望は見事といわれ、ここからいつしか「月見寺」の別名も生まれたようです。

名月に酔いしれ、極楽浄土の眺めを味わう。はるかかな時代の風流に、雅やかな小旅行が楽しめます。

大正改修における長良川改修と揖斐川改修

三川分流を実現した木曾三川下流改修の結果、改修区域の洪水は激減しましたが、上流部分は依然そのまま。このような状況は、洪水の不安はもろろん、下流改修にも影響を与えかねないため、大正十年、木曾三川上流改修に着手。長良川の本化をめざした長良川改修は大正一三年から、在来堤の拡築や新堤の築造をめざした揖斐川改修は、大正十二年から、本格的に実施されました。



現在の長良川（長良橋 - 金華橋）

長良川改修の概要

大正改修当時、古川、古々川、井川新川ともいうが現在の長良川（の三筋に分かれて流れていた長良川は、岐阜市の南西端で一本にまとめられていましたが、これを一本化し、岐阜市市街地区には特殊堤を築造することを主目的に工事は始められました。改修区域は、左岸が岐阜市から羽島市桑原町まで、右岸が海津郡海津町に至る区間

長良川改修の実施状況

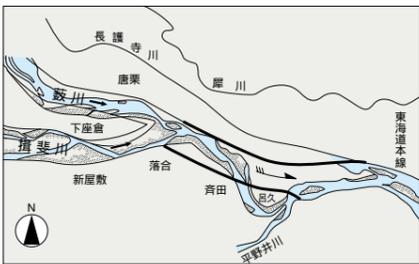
支派川の改修をも含めた長良川改修は大正一三年に着手されました。工事はまず、下流改修で残されていた西小藪（現・羽島市桑原町）の旧川締切を行い、上流部では長良橋下流で分派、合渡村（現・岐阜市）一日市場町で再び本川に合流していた古川・古々川の分派口を締切り、本川との合流を約1km下流の現伊自良川合



長良川・岐阜地先の工事概要

流点に付替えました。一方、本川では金華山から下流忠節橋までの岐阜市街区間に特殊堤を築造し、それより下流では天王川・糸貫川及び犀川合流点を締切り、犀川には新水路を開削しました。この締切点にあたる森部（現安八町）には逆水樋門を設置。河幅の拡大や河状の整理、用水路付替、橋梁架替等の各付帯工事の実施とあわせて、洪水の疎通を図りました。施工状況は前頁の表に示すとおりです。なお、古川の締切及び付替工事、岐阜市の特殊堤の築造工事の詳細は、KISSO一八号九一〇頁をご参照ください。《岐阜地先の改修》

川、天王川、糸貫川の締切及び穂積町地先の引堤、新堤の築造並びに在来の堤防の拡築、増強の工事であり、あわせて水衝部の護岸、水制工事を行いました。昭和五年に工事に着手し、同一年、新犀川の通水後、犀川合流点の締切を施工。同一年までに天王川及び糸貫川の合流点締切箇所を除き、下流から合渡橋付近までの築堤を完成しました。合渡橋より上流の築堤は昭和二年に着工し同二年に竣工。糸貫川は昭和一九年三月末に上流の分派口敷川との締切の後、休工のやむなきにいたりましたが、昭和三年九月より長良川との合流締切工事に着手し、昭和五年に樋門を含めて締切の全工事を完了しました。天王川合流点の締切は支派川改修と関連があり遅れていましたが、支派川改修による天王川新水路の通水を待って、いよいよ締切ることとなり、昭和五年締切築堤に着手し、翌年に竣工しています。



揖斐川・呂久地先の工事概要

揖斐川は数川合流点より上流を除いては川幅が相当広いので、在来の堤防の拡築を行い、従来、堤防がなかった下流部の鷺田付近では、堤防を新たに築造。平野井川・津屋川などは揖斐川との合流点に水門・樋門を設け締切することなどを主な目的に工事は実施されました。当初計画では、岐阜県揖斐郡揖斐川町から東海道線鉄橋（右岸・大垣市左岸・安八町）までの両岸約一八kmを対象とし

《呂久地先の新川付替工事》大正二二年八月に着工された呂久地先の新川付替工事は、木曾川上流改修の中でも最初に着手した場所となっています。呂久地先は従来、河幅が狭く湾曲もはなはだしく、付近は無堤地であるため、ひとたび大雨が降れば、両岸一帯の広大な区域に氾濫し、多大な被害を及ぼしました。そこで、これを防止するために、特に湾曲の激しい平野井川合流点より上流付近に、延長一・五kmの新川を開削・築堤し、必要に応じて護岸・水制を施工しています。また、右岸には平野井川樋門の新設により締切り、左岸では護

ていきましたが、昭和二六年度からは計画を変更。左岸は海津郡平田町今尾に至る区間を追加し、それより下流は木曾川下流工事事務所の管轄となりました。また右岸は、海津郡南濃町上野河戸まで約二kmの区間を追加することに変更されました。関係地域は、岐阜県揖斐川町・大野町・川合村現大野町・栗南町・安八村現安八町・大垣市・輪之内町・平田町・海津町・養基村（現揖斐川町）・池田町・神戸町・養老町・南濃町。計画高水量は、牧田川合流点上流数川合流点までが約三・三四〇m³。数川合流点から上流は約二〇九〇m³でした大正一〇年当時（現栗南町、数川合流点の下流から東海道線付近）地先に新川を開削し、両岸に新堤を築造しました。数川は全川にわたり掘削し、河積の増大を図るとともに、付帯工事では取水施設を山口に統合・現在のような姿となりました。一方、牧田川は現・養老町の河道を拡大し、背割堤を設けて杭瀬川を分流させ、合流点を約三四km下流に移行させました。

《揖斐川改修の実施状況》揖斐川では数箇所の露堤を締切り、呂久（現栗南町、数川合流点の下流から東海道線付近）地先に新川を開削し、両岸に新堤を築造しました。数川は全川にわたり掘削し、河積の増大を図るとともに、付帯工事では取水施設を山口に統合・現在のような姿となりました。一方、牧田川は現・養老町の河道を拡大し、背割堤を設けて杭瀬川を分流させ、合流点を約三四km下流に移行させました。



呂久新川切落し風景

木曾川上流改修（長良川）工事施工状況一覧表

Table with 15 rows and columns detailing construction progress for the Nagara River project. Columns include No., 工事名 (Project Name), 施工年度 (Construction Year), and 主な工事内容・その他 (Main Work Content/Other). Rows list various tasks like riverbed cutting, dam construction, and bridge replacement.

木曾川上流改修（揖斐川）工事施工状況一覧表

Table with 11 rows and columns detailing construction progress for the Ibi River project. Columns include No., 工事名 (Project Name), 施工年度 (Construction Year), and 主な工事内容・その他 (Main Work Content/Other). Rows list tasks like dam construction, riverbed cutting, and bridge replacement.

参考文献 『木曾川上流改修工事誌』 『木曾三川治水百年のあゆみ』

長良・揖斐両川の大正改修をたどる



安藤 萬壽男先生

略歴
愛知大学名誉教授・前愛知産業大学総長・経済学博士
『輪中 その形成と推移』など輪中に関する著書、論文多数。

はじめに

大正改修は明治改修のあとをつけて、長良川では羽島市南部からの上流の部で、揖斐川では海津郡平田町からの上流の部で、それぞれ実施された。これを地形的にみると、両川とも改修工事区域の下流部は濃尾平野の自然堤防（後背湿地帯）以下、自然堤防帯と略称）であり、上流部は扇状地に当たった。

大正改修での河川工事には各様の内容が含まれているが、本号では長良・揖斐両川の本川を中心に述べることにする。

両川の本川にみられる大正改修の主要工事

大正改修を一口でいえば、この両川の流れを整備して河川の近代化を図ることになったといえるが、その流域の地形との関連から、主要工事を次の三種類にわけることができる。

①、山地の狭い谷底平野から急に広い平野部に河川が流出して扇状地を形成する場合に、河川が一筋だけでなく二筋三筋の流路に分かれ、それらが谷口から放射状に流下する場合が多い。長良川での古川、古々川（現）

長良川の三筋がそれである。

古川、古々川、長良川の流路については八頁（図）「長良川・岐阜地先の工事概要」を参照。

また、揖斐川の大きな支流である根尾川が山地から平野部に出るとすぐ、糸貫川を東南方向に分派していたのもその適例である。このように河川が扇状地上を分派して流下している、洪水時の治水対策が難しく、これを一本にまとめる必要があった。この場合本川となる川以外は廢川となる。

扇状地上を急流で流下した川の流速は地形上の傾斜が低下する自然堤防帯に移ると減退するので、洪水時にはそこで洪水位が高まり、破堤などが起こりやすい。そのため、以前はこの部分に遊水地を設けて洪水位の上昇を緩和するなどが図られてきた。本巣郡穂積町の南部はこのような機能を担っていた。大正改修時までは、この部分の長良川右岸は無堤であった（図2a）。揖斐川では本巣郡東南町呂久付近で揖斐川右岸の無堤であった部分がこれに当たる（図4a）。このような遊水地としての機能を担ってきた部分にも築堤をし、その地に毎年のように襲来する水害から

解放することが大正改修では必要であった。大正改修が実施された区域全般にわたって、長良・揖斐両川の本川の曲流部分をなるべく直線化し、川中の狭い部分は堤防を堤内に後退させ（引堤）、これらの工事によって洪水流をなるべく多く、かつ、早く海に流送することが必要であった。

大正改修では全域を通じて堤防はそれ以前に比べると、規模が統一され、大きさも巨大化した（天端、堤頂面、のち七m、天端より3m下った所に四mの小段を設けた）。その用土は機械力を利用して、堤外地の砂壤土を主に使って築堤している。それ以前の旧堤は堤防の規模こそ低小であったが、用土は粘土質の土を堤内から求めていたとは異なっている。

大正改修に伴った紛争 犀川事件

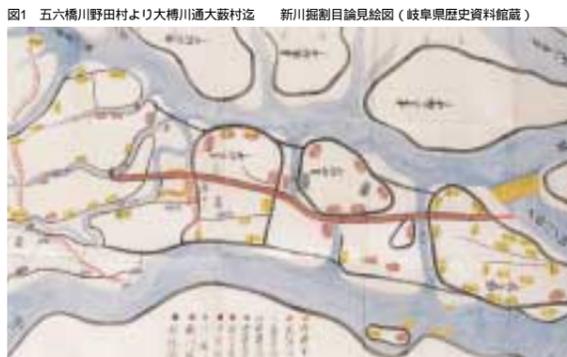


図1 五六橋川野田村より大橋川通大敷村迄 新川掘削目録縮図（岐阜県歴史資料館蔵）

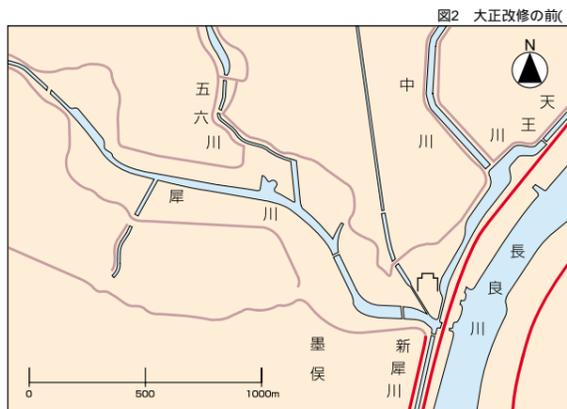


図2b 平成6年修正測量 2万5千分1地形図「岐阜西部」をベースに作成

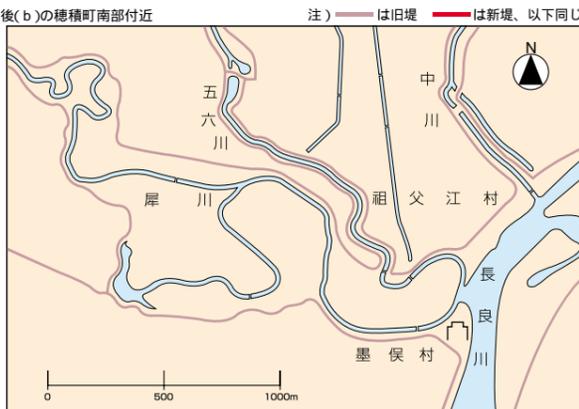
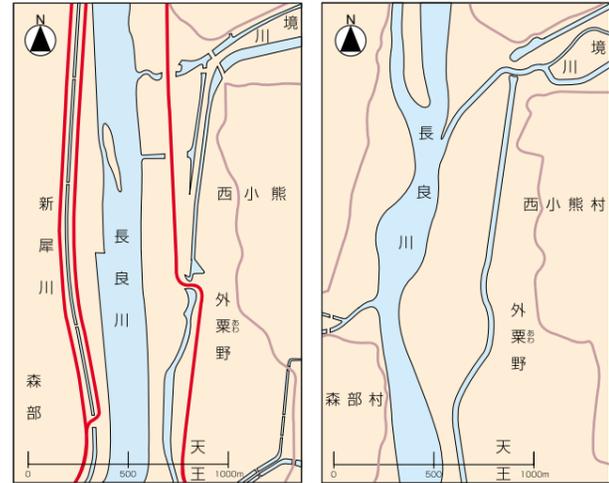


図2a 明治24年測量 2万分1地形図「大垣」をベースに作成。

大正改修において実施された治水策は、この時始めて構想されたものではなく、近世にも類似した企画が立てられている。しかし

図3 大正改修の前(a)と後(b)の羽根島市北西部付近と新犀川



ここでは近世の幕藩体制のためそれを実現し得なかったといってもよい。例えば、木曾川左岸の尾張国は尾張藩の一田支配のため、尾張藩創立直後の慶長十三（一六〇八）一六〇九）年に当時、木曾川扇状地を流下していた尾張国側の木曾川支流川を全部締切りに、いわゆる「御田堤」を築いて守っている。しかし美濃国側の平地には幕領、尾張藩領、旗本領、譜代大名領が錯綜して存在し、統一した治水政策の実現が困難であったといえる。ここで例示する本巣郡穂積町南部の悪水をより下流部にまで新川開削によって排水しようとする構想は享保二十（一七三五）元文二（一七三七）年間、美濃郡代として在任した井沢弥惣兵衛が永年によってすでに発案・企画されているといわれる（図1参照）。

穂積町南部では主として揖斐川支流根尾川が形成した扇状地の末端部に当り、東から天王川・中川・五六川・犀川の諸川は全この扇状地末端部で湧出する湧水を集めて流下する清冽な川であった。しかし大雨時には高

位部から悪水がこの低地におし寄せ、毎年のように水稲は水腐れを繰り返していた。この悪水を上述の遊水地から長良川に排水していたのでは悪水の停滞期間が永くなるのでそれを改めて、上述の井沢が永の構想に準じて下流部にまで新川を開削することが企画された。このことはこの地域の人々の永年の悲願であり、近代では大正十一年（一九二二）年頃から実現に向けて運動が活発化し、昭和三年（一九二八）年四月にはこの（犀川）切落工事を大正改修の付帯工事として実施することが当時の帝国議会で議決された。

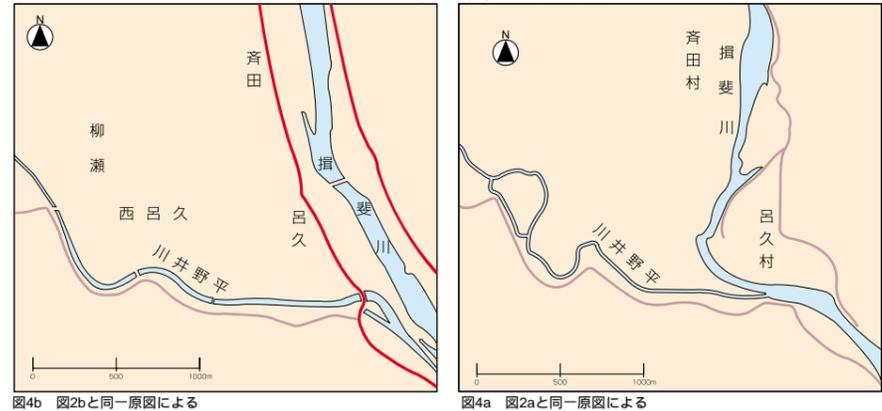
一方、この新川の通路に当たる安八郡の墨俣町以下七町村はこの工事に猛反対し、しばしば要路に陳情を繰返してきたが、この要望が認められなかった。七町村の首長以下の職員が昭和四年一月七日、全員辞職した。これに対し岐阜県は町長以下の事務官を任命。同月八日、各役場に警官警固のもとに赴任したが、そのうち、名森村役場において警官と反対住民の間で衝突が起き、その鎮圧のため多数の警官の他、軍隊まで出動するに至った。この騒動の後、犀川の切落工事は最も規模を小さくして、墨俣町から安八町に至る、長良川沿いに新犀川を開削することで実現した（図2b、図3a）。

大正改修以後の土地利用の変化 活用

大正改修によって大きく土地利用が変化し、新しい活用が展開した主要な事例を以下に述べる。

一、堤外地（河川敷）の変化・活用
大正改修によって、河川敷の中が従前より拡張した部分が多い。ここで大正改修以後、長良・揖斐両川では砂礫の採取が進み、また揖斐川ではダム造成で上流からの土砂の流送が著減した。このため、河川敷のうち、洪水時以外は冠水しない高水敷で、常時水が流れている低水路が明確に高ざで区

図4 大正改修の前(a)と後(b)の東南町呂久付近



BOOK LAND

安藤 萬壽男
「御田堤」についての通説を訂正す
にほんのかわ 第70号（1995）

木曾川左岸、尾張国側に家康の命で築造されたといわれる御田堤について、岐阜県治水史が、その規模の強大さ、連続堤の長さ（大山・弥富間）、当時の大坂方からの攻撃防禦の目的などを述べ、これが通説の代表となっており、周辺の市町村史の多くがこの説をとっている。著者はこれに疑問をもち、堤防はそれほど強大ではなく、連続堤も大山から祖父江町辺りまでであることを述べると共に、御田堤は木曾川治水の一環として、それ以前の利根川上流部の治水策と軌を一にして、必ずしも美濃国側の軽視ではない。そして、御田堤は木曾川水路の確保と尾張の新田開発をめざしてと説くという注目をすべき論文である。

分できるようになった。このため、この高水敷を農地として畑や牧草地に借用したり、都市近郊では運動場などに活用されるようになってきた。

一方、大正改修以前には堤外地にも民家があった。その中には羽島市の西小瀬の一部・外栗野・天王のように集落として存在していた場合もある。これらの集落は大正改修でこれらの集落の河川側に新堤を築いて堤内集落に改め（図3a、b）三三五五に分布する民家の場合は堤内に移転させている。かくて長良川の長良橋付近の両岸の場合を除くと今日では堤外地に民家は見られな

二、廢川地の利用

既述の長良・揖斐両川の廢川地は大正改修以前は土砂が堆積して天井川の様相を示し、その土壌は砂質であった。これらは廢川後、砂壤土を活用して露地の野菜畑や施設園芸用（利用したり）（神戸町音田）（図4a、b）、果樹園や工場・学校敷地となったり（旧糸貫川河川敷）、さらに長良古川、古々川跡のように、岐阜市の発展につれ、住宅地、運動場、参考文献
『犀川騒擾事件史』（昭和四十六年刊）
犀川騒擾事件史編纂委員会編集兼発行

民話の小箱

田代池の龍神伝説

昔むかしのこと。伊勢の中津原に太四郎という庄屋がおりました。ある年の夏、ひどい日照りが続き、大切な作物や田畑は目も当てられないほどに荒れてしまいました。困り果てた村人たちの様子に心を痛めた太四郎は、多度の山奥の池に住むといわれる「片眼の龍」のもとへ、たったひとり、雨乞いにいくこととしたのです。

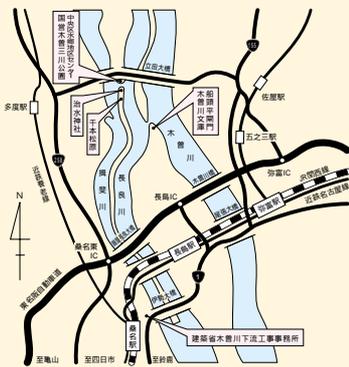
蝉時雨の山道を登って池へたどり着き、一心に念じていると一陣の風がサッと太四郎の頬をかすめました。と同時に竜巻が巻き起こり、あたり一面は漆黒の間、驚いて目をこすると、そこにはあの片眼の龍が浮かび上がっていました。「龍神様、村人が困っています。どうぞ雨を降らせてください。」。拜むようにつぶやく太四郎へ、龍は鋭く片眼を光らせながら「雨が欲しかったら、おまえの一人の娘のどちらかを着せて出せ。そうすれば、必ず三日のうちに雨を降らせてやる」と言い放ちます。しばらくつなだれていた太四郎でしたが、やがて腹を決め三日のうちに雨を降らせれば、娘を差し出すことを確約して山をおりたのです。

村が救われる安堵、娘を失う悲しみ。突然と村へ戻った太四郎は、涙ながらに家族へこの話を打ち明けました。娘たちはただ泣くばかりでしたが、翌朝、龍の化身と名乗る武士が迎えに現れると、はた織りをしていた次女がいさぎよく進み出て、武士とともに音もなく消え去りました。すると、空はにわかにかき曇り、雷鳴とともに大粒の雨が村を潤し始めたのです。三日三晩降り続けた大雨に村中は大喜びでしたが、ただ一軒、太四郎の家だけが、主のないはた織り機を見ては悲しみにくれているのです。

しばらくして太四郎は次女を慰めようと、はたをあの池へ沈めにいきました。五色の糸を通したはたは、渦巻きながら池の底に吸い込まれていきます。すると太四郎の耳に、「チャカラン、チャカラン……あの懐かしいはた織りの音が聞こえてきたのです。後にこの池は「太四郎池」(＝田代池)と呼ばれるようになります。毎年、村人が雨乞いに訪れるようになったといえます。そして今でも夜中になると、チャカラン、チャカラン……とはた織りの音が聞こえるといわれています。



木曾川文庫利用案内



- 《開館時間》午前9時～午後4時30分
- 《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
- 《入館料》無料
- 《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平開門管理所・
木曾川文庫
〒496 愛知県海部郡
立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

「羽根谷だんだん公園」の名づけ親は岐阜県知事。この公園には「全建賞」「手づくり郷土賞」という2つの大きな賞が贈られました。全建賞は(社)全日本建設技術協会の主催で、毎年、優秀な建設事業に贈られるもの。手づくり郷土賞は建設省主催で、地域のシンボルとなっている道路や水辺などを表彰するものです。これらの同時受賞は珍しく、施設が高い評価を受けたことになります。秋は行楽のシーズン。ぜひ、お出かけ下さい。

編集部では皆様のご意見、ご感想をお待ちしています。宛て先は木曾川文庫まで。今回の編集にあたっては、南濃町と安藤萬壽男先生にご協力をいただきました。ありがとうございます。次回は輪之内町を特集します。ご期待ください。

表紙写真
左上:羽根谷だんだん公園のシンボル 竜のモニュメント
右上:山の灯台(月見の森) 下:清流・津屋川